

【漁況】

[マアジ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成21年は16万5千トンとなりました。

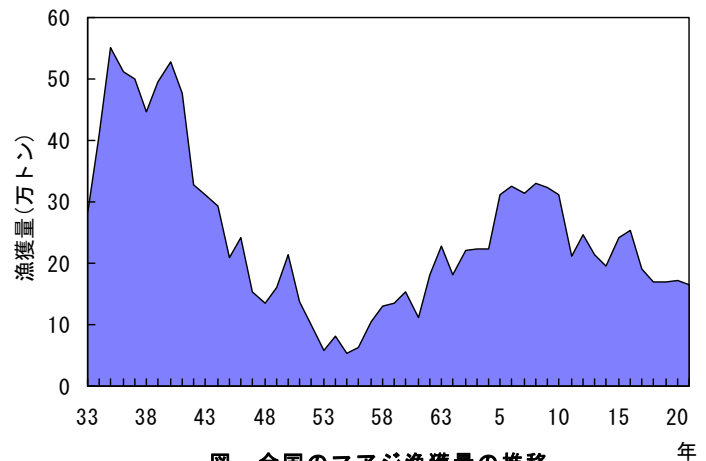


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成 23 年 7～9 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、漁場が形成されませんでした。

4 港計のまき網では、マアジ小（1 歳魚：平成 22 年生まれ）、マアジ仔（0 歳魚：平成 23 年生まれ）主体に 122 トンの水揚げがあり、前年の 22 % 及び平年の 12 % と非常に低調な漁模様となりました。

3. 平成 23 年 10～12 月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ仔（0 歳魚：平成 23 年生まれ）、マアジ小（1 歳魚：平成 22 年生まれ）でマアジ中（2 歳魚以上）も混じるでしょう。

来遊量は、前年、平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

漁獲主体となるマアジ 0 歳魚は、これまで非常に低調に推移していることから、前年、平年を下回ると考えられます。マアジ 1 歳魚も、これまで低調に推移していることから前年、平年を下回ると考えられます。

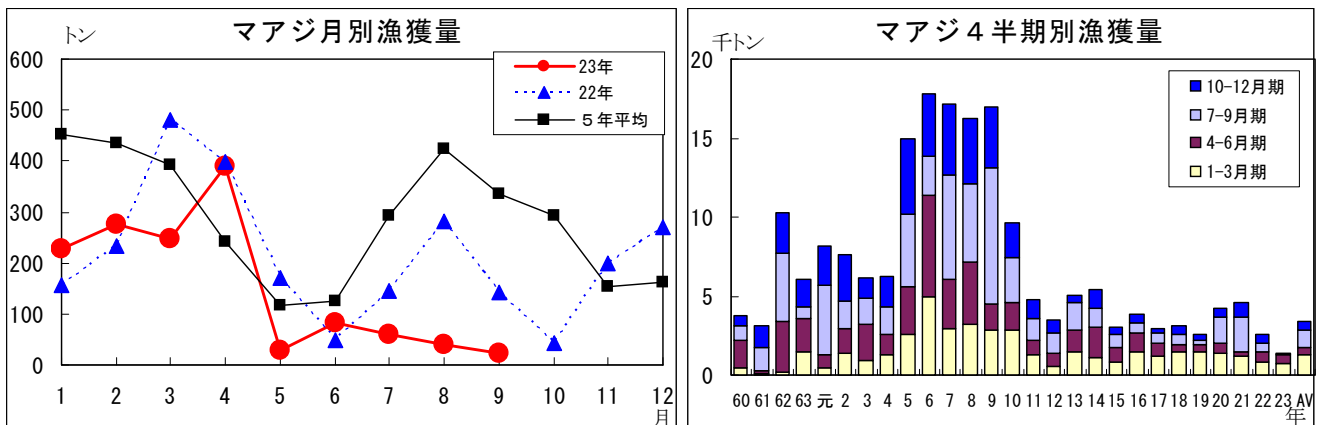


図 マアジまき網漁獲量変化（4 港計）

※平年値は過去 5 年（平成 18～22 年）の平均値 (AV)、平成 23 年 9 月 21 日までの水揚げ量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成5年から増加に転じ平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、その後減少し平成14年は27万9千トンとなりました。平成17年から再び増加し平成21年は47万1千トンとなりました。

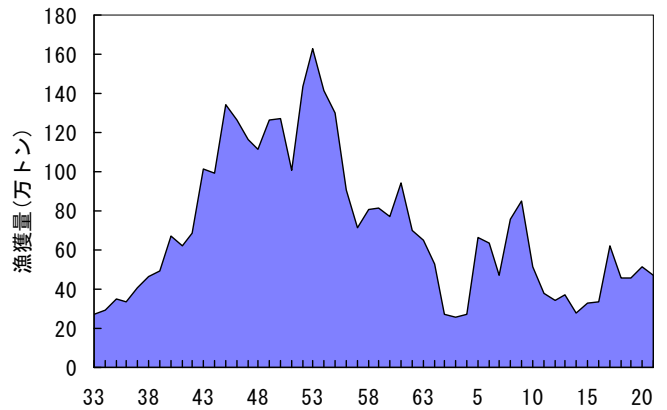


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 平成 23 年 7～9 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甌島西，甌島東に漁場が形成されました。

薩南海域では、島間沖，竹島沖，屋久島南，野間池沖に漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、北薩海域でゴマサバ小，中（2 歳魚：平成 21 年生まれ）主体，薩南海域ではゴマサバ中小，小（2 歳魚：平成 21 年生まれ）主体に 8,192 トンの水揚げで，前年の 168 % 及び平年の 202 % と好調に推移しました。

3. 平成 23 年 10～12 月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中小（2 歳魚：平成 21 年生まれ），ゴマサバ豆（0 歳魚：平成 23 年生まれ）となるでしょう。

来遊量は前年並で，平年を上回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は，現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

ゴマサバ 0 歳魚は，好調な来遊があることから前年を上回ると考えられます。ゴマサバ 1 歳魚は，加入状況が平均的で近隣海域での漁獲もないことから，前年を大きく下回ります。ゴマサバ 2 歳魚は，加入豊度が高い年級群で今期も漁獲の主体として来遊し前年を上回ると考えられます。ゴマサバ 3 歳魚以上は，来遊する期間ではなく若干混じる程度と考えられます。

以上のことから，非常に好調であった前年並で，平年を上回ると考えられます。

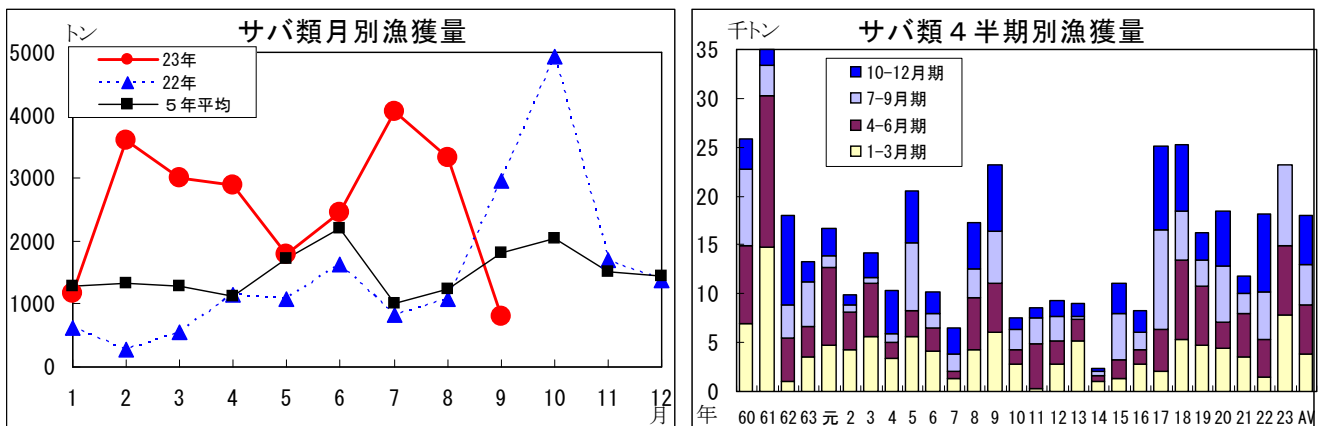


図 サバ類まき網漁獲量変化（4 港計）

※平年値は過去 5 年（平成 18～22 年）の平均値(AV)，平成 23 年 9 月 21 日までの水揚量を使用。

[マルアジ（アオアジ）]

1. 漁獲量の動向（水産技術開発センター調べ）

マルアジの漁獲量は、昭和 62 年から平成元年に 1,500 トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成 12 年から 15 年に再度ピークを迎え 15 年には 3,150 トンと最高を記録しました。平成 16 年以降は低調に推移し、21 年は過去最低の 94 トンとなりましたが、22 年は増加し平年並みの 371 トンとなりました。

2. 平成 23 年 7～9 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

野間池沖で他の魚種に混じって漁獲され、期全体で 81 トンの水揚げで、前年の 195 % 及び平年の 155 % でした。

3. 平成 23 年 10～12 月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ豆（1 歳魚：平成 22 年生まれ）でしょう。

来遊量は前年を下回って、平年並みになるでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

マルアジの来遊は、低調に推移していることから前年を下回って、低水準の平年並みと考えられます。

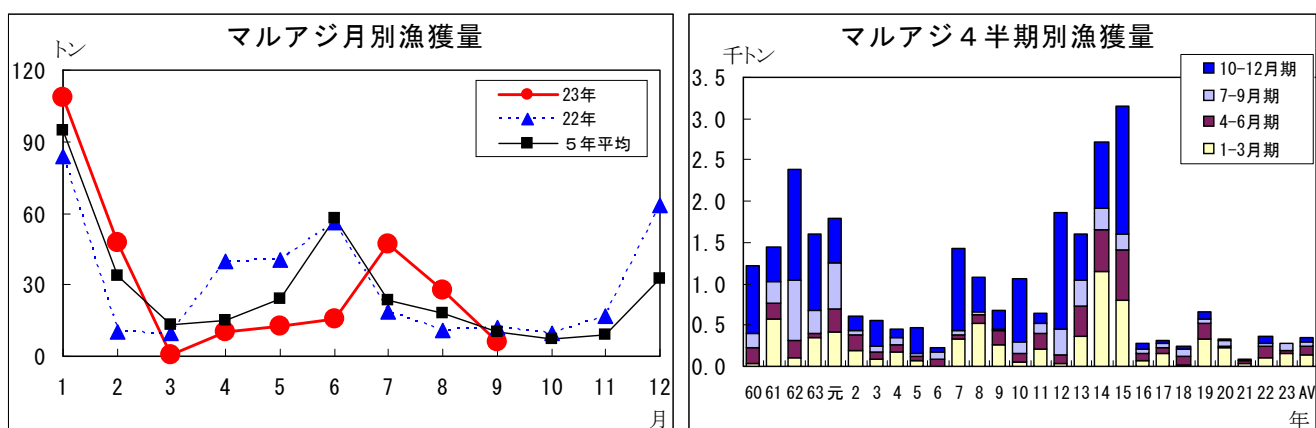


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化（4 港計）

※平年値は過去 5 年（平成 18～22 年）の平均値 (AV)、平成 23 年 9 月 21 日までの水揚げ量を使用。

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。

その後さらに減少し平成14年は5万トンとなり、以降横ばい傾向で平成21年は5万7千トンとなっています。

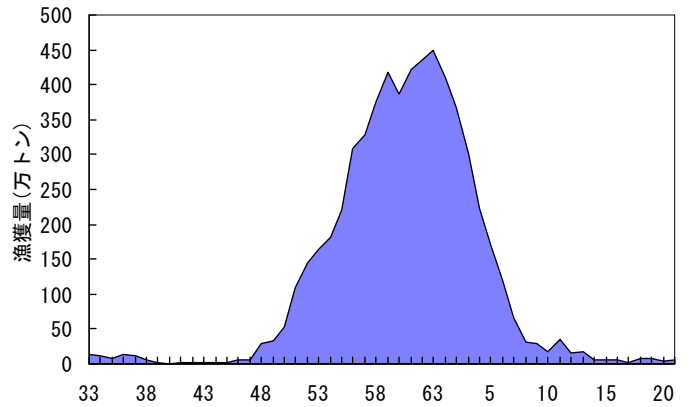


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 平成 23 年 7～9 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島東，八代海で漁場が形成されました。

薩南海域では漁場が形成されませんでした。

北薩海域の棒受網では、川内沖～阿久根沖にかけて漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、小羽(0 歳魚：平成 23 年生まれ)主体に 414 トンの水揚げで前年の 1887 %，平年の 230 %と好調に推移しました。

北薩海域の棒受網は、小羽(0 歳魚：平成 23 年生まれ)主体に 113 トンの水揚げで前年の 163 %，平年の 388 %と好調に推移しました。

3. 平成 23 年 10～12 月期の見とおし

漁獲の主体は、小，中羽(0 歳魚：平成 23 年生まれ)でしょう。

来遊量は前年，平年を上回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

北薩海域では、前期の漁況が継続し0 歳魚主体に前年，平年を上回ると考えられます。

薩南海域では、近県の漁況からウルメイワシ来遊が好調になると予測されることから、混獲されるマイワシも前年を上回ると考えられます。

以上のことから、来遊量は前年，平年を上回ると考えられます。

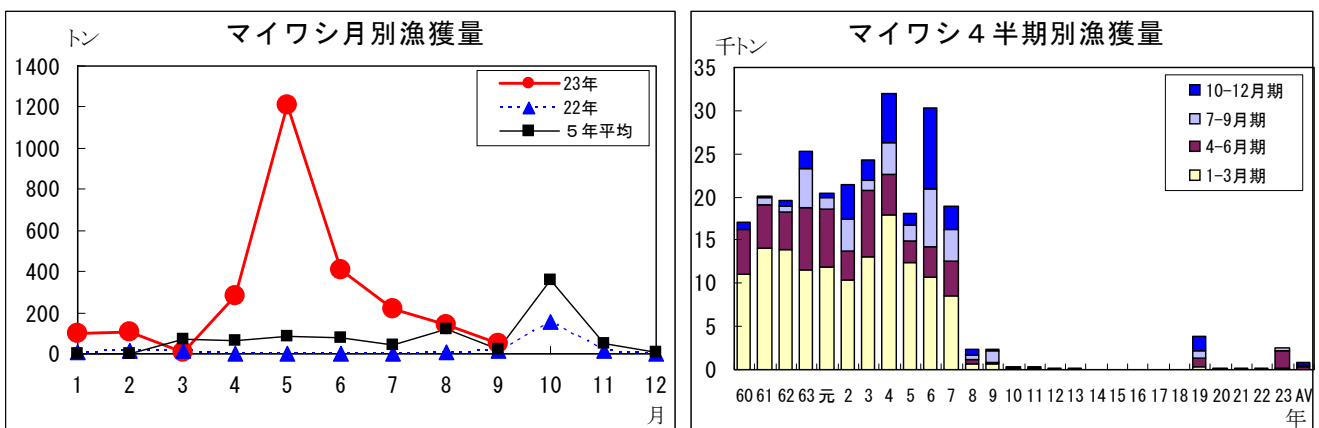


図 マイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年（平成 18～22 年）の平均値(AV)，平成 23 年 9 月 21 日までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりました。その後、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。その後減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トンとなりましたが、近年は増加傾向となり、平成21年は5万4千トンでした。

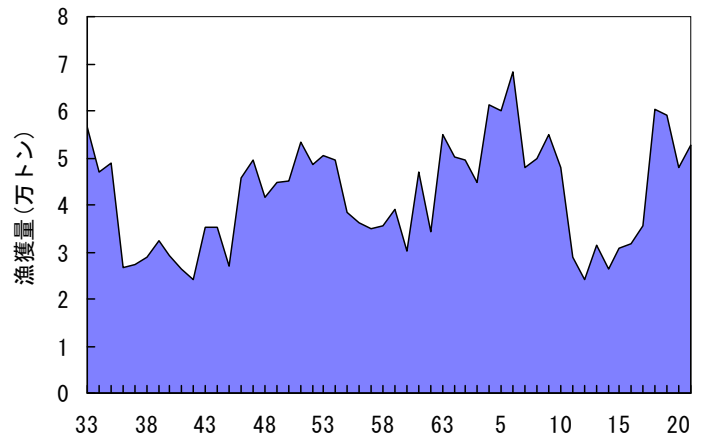


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成 23 年 7～9 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甌島西，甌島東，八代海に漁場が形成されました。

薩南海域では、野間池沖に漁場が形成されました。

4 港計のまき網では、小羽(0 歳魚：平成 23 年生まれ)主体に 1,088 トンの水揚げがあり、前年の 141%，平年の 122%となりました。

北薩海域の棒受網では、小羽(0 歳魚：平成 23 年生まれ)主体に 1,343 トンの水揚げがあり前年の 125%，平年の 167%と好調な漁況となりました。

3. 平成 23 年 10～12 月期の見とおし

漁獲の主体は、小，中羽(0 歳魚・平成 23 年生まれ)になるでしょう。

来遊量は前年，平年を上回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は、九州東岸を南下し薩南海域で漁獲される群が主体となります。

太平洋南部各県は、今期の予測を好調で前年を上回るとしていることから、薩南海域への来遊は、前年，平年を上回ると考えられます。

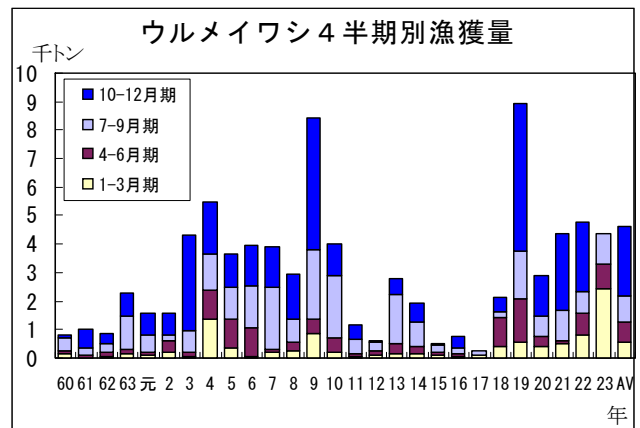
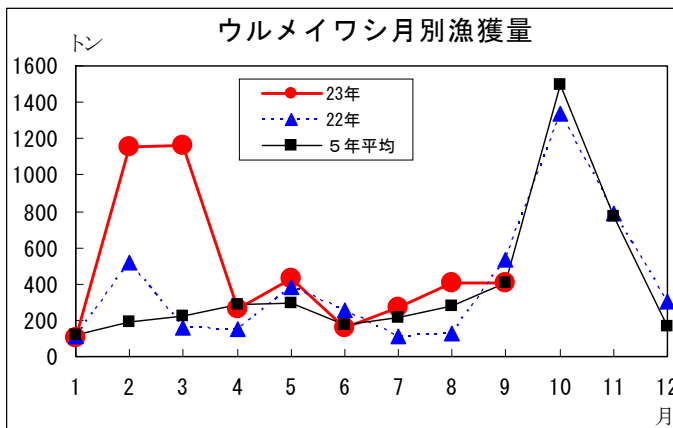


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年（平成 18～22 年）の平均値(AV)，平成 23 年 9 月 21 日までの水揚量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成21年は34万2千トンとなりました。

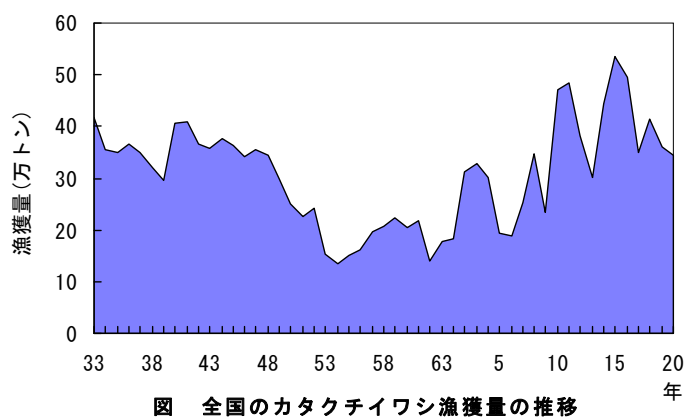


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成 23 年 7～9 月期の漁況の経過

【4 港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域の長島、甌東に漁場が形成されました。

4 港計のまき網では大羽（1 歳魚・平成 22 年生まれ）主体に 473 トンの水揚げで、前年比 61 %，平年比 82 %と前年・平年を下回り、北薩海域の棒受網では中、大羽（1 歳魚・平成 22 年生まれ）主体に 308 トンの水揚げで、前年比 151 %，平年比 125 %と、前年・平年を上回りました。

3. 平成 23 年 10～12 月期の見とおし

期間の前半は大羽（1 歳魚・平成 22 年生まれ）が漁獲の主体で、後半は小～中羽（0 歳魚・平成 23 年生まれ）が漁獲の主体となり、平年・前年を下回るでしょう。

（根 拠）

前期の漁況や、西薩海域のバッチ網の漁況から来遊水準は低いと考えられます。

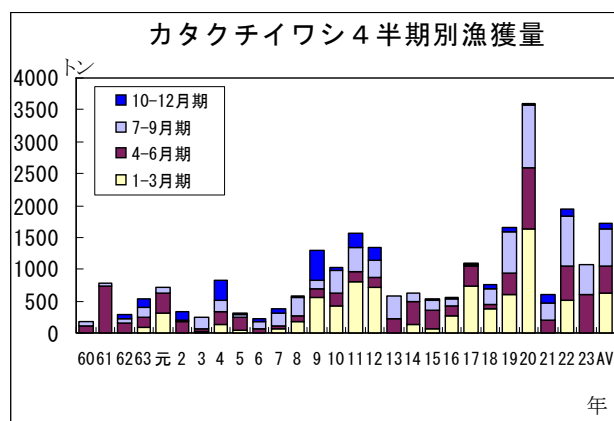
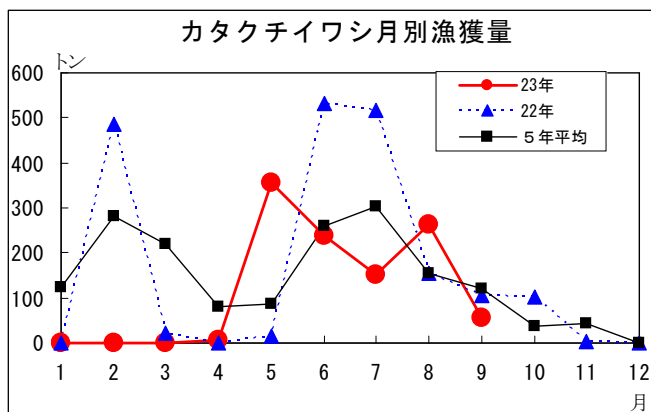


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4 港計）

※平年値は過去 5 年（平成 18～22 年）の平均値（AV），平成 23 年 9 月 21 日までの水揚量を使用。

[イワシ類参考資料]

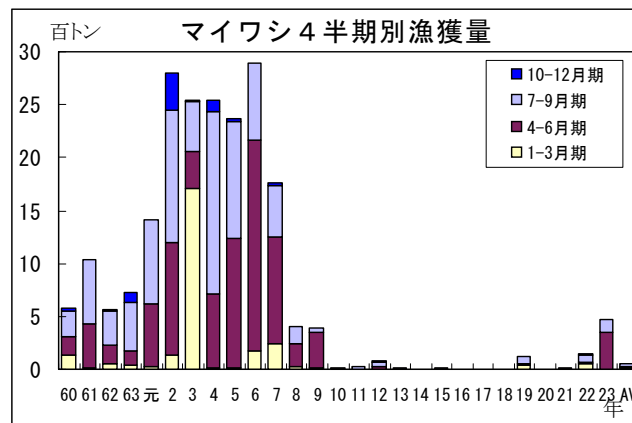
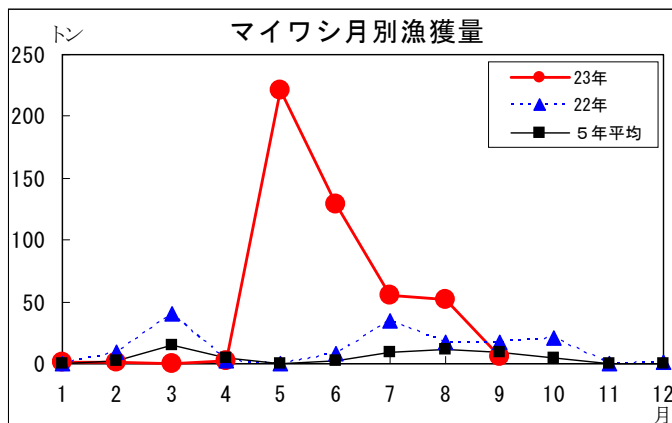


図 マイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

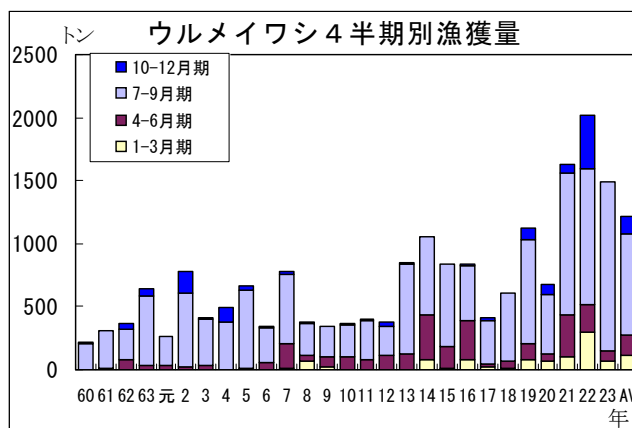
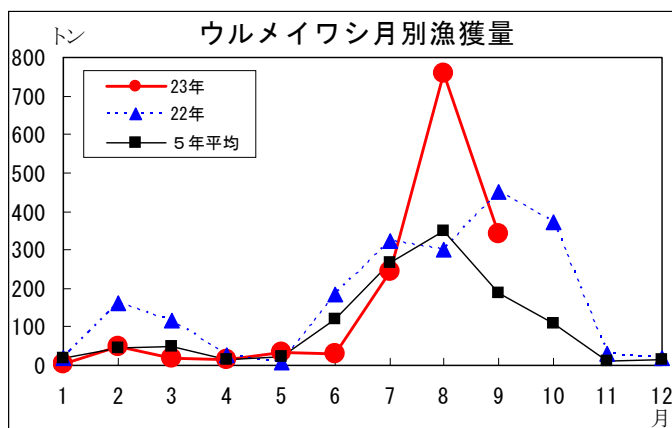


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

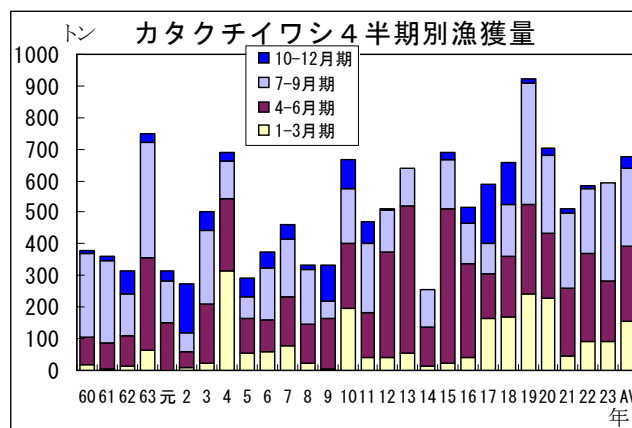
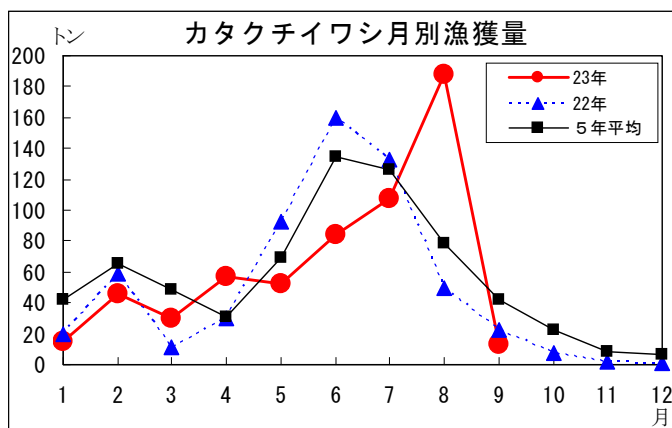


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年(平成18~22年)の平均値(AV),平成23年9月21日までの水揚量を使用。

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（4港計）〉

1. 経年変化及び平成23年7～9月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移となっています。平成22年は2,185トンとなりここ5年間横ばいとなりました。

平成23年7～9月は、薩南海域では、ゴマサバに混じってモロ小とクサヤモロ中小が漁獲されました。期全体で466トンの水揚げで、前年の204%及び平年の100%となりました。

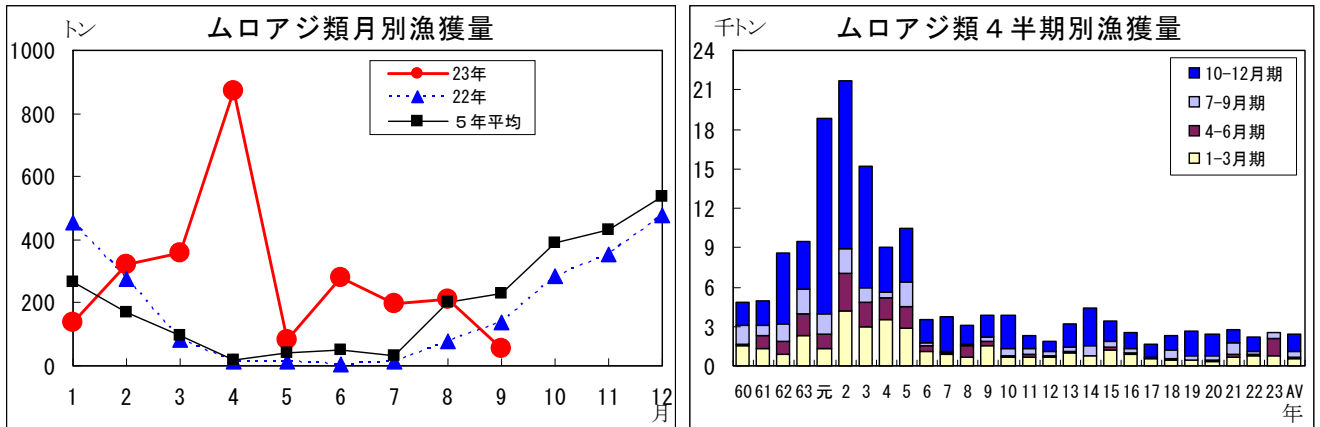


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成18～22年）の平均値(AV)、平成23年9月21日までの水揚量を使用。

〈オアカムロ（4港計）〉

1. 経年変化及び平成23年7～9月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに一旦減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年は2,291トンと一旦増加しましたが、再び減少傾向で平成22年は882トンとなりました。

平成23年7～9月は、薩南海域では、ゴマサバに混じってオアカムロ中小が漁獲されました。期全体で216トンの水揚げで前年の639%及び平年の66%となりました。

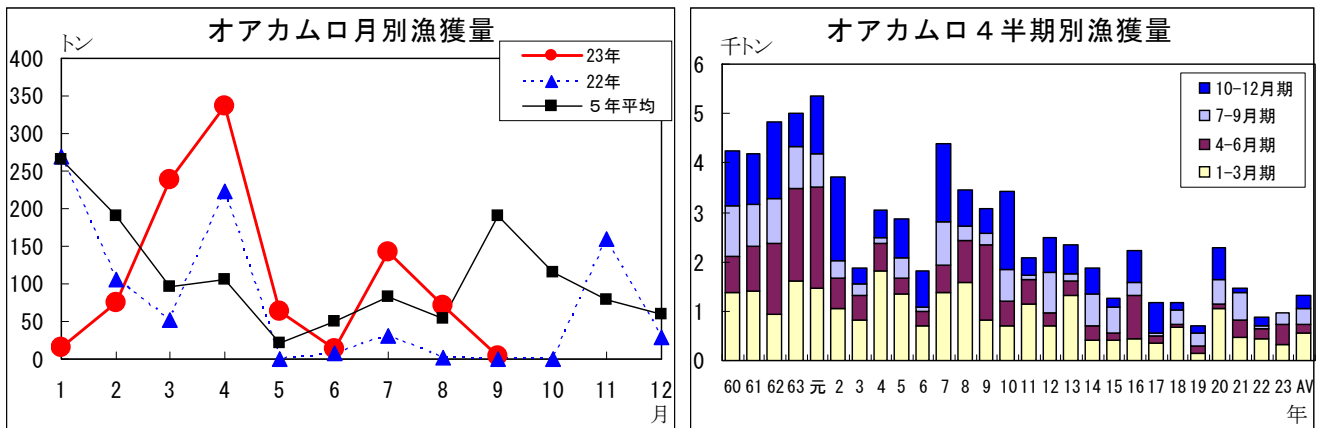


図 オアカムロまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成18～22年）の平均値(AV)、平成23年9月21日までの水揚量を使用。